

# 山梨大学教育学部における教育ボランティア活動の変遷

Transition of Educational Volunteer Activities at the Faculty of Education, University of Yamanashi

角田 修\* 澤登 義洋\* 秋山 光永\*  
 TSUNODA Osamu SAWANOBORI Yoshihiro AKIYAMA Mitsunaga  
 田中 勝\*\*  
 TANAKA Masaru

**要約**：教育ボランティア活動は平成15年度山梨県放課後チューター事業を出発点とし、今年度で16年目を迎えた。現在は教職支援室教育ボランティア領域、及び教育学部教育ボランティア委員会、教育ボランティア学生運営委員会が連携して運営にあたっている。本稿は、教育ボランティア活動による学びの充実や教育実践力の向上を目的に、過去16年間の教育ボランティア活動を4期（導入期、量的拡充期、質的転換期、見直し・発展期）に分け、実績、単位化、運営方式、指導内容等の面から整理した。県内教育機関等からのニーズの高まりや多様化に応じていくためには参加学生数の確保と共に、活動内容やそこから得られる学びを深めるなどさらなる質向上の時期に来ていることを指摘した。学生指導や活動内容に関する情報の受入機関との共有、教育ボランティア学生運営委員会の主体性を育む指導のあり方、学部教育・教育実習・教員採用試験対策と連動した教育ボランティア活動の進め方等を課題として提起した。

**キーワード**：教育ボランティア、質の向上、学びの充実と視点

## I はじめに

山梨大学教育学部教職支援室には「教職支援」と「教育ボランティア」の2領域があり、互いに連携して教育学部学生の教職支援や実践的指導力の向上等をサポートしている。学部における教育ボランティア活動は教職支援室設置（平成24年度）前にスタートし、今年度で16年目を迎える。質の高い教員養成のためには、入学後の早い段階から子どもとふれあい、学校や教師の仕事を理解することが重要であり、教育ボランティア活動の果たす役割は大きい。学生が積極的に教育ボランティア活動へ参加し、教師にとって必要な実践力を身に付けていくことは、教員採用試験にもプラスに働くはずである。

山梨大学教育学部における教育ボランティア活動の評価については、教育ボランティア活動が学生の教育実践力の育成にどのような効果があるのかを探究した進藤聡彦ら（2009）の研究<sup>1)</sup>のほか、嶋田一彦（2012）による教育ボランティアの教育的価値についての検討<sup>2)</sup>がある。本論文ではこうした先行研究を参考にしながら、教員養成学部における教育ボランティア活動のあり方を展望するために、山梨大学教育学部教育ボランティア活動の歩みを通史的にふり返り、よりよい活動へと高めていくための現時点での課題を整理しようとするものである。

資料としては、「教育ボランティアガイダンスブック<sup>3)</sup>」や「センターだより」等、教職支援室及

\* 教職支援室（教育学部附属教育実践総合センター教職支援部門）

\*\* 社会文化教育講座・教育学部附属教育実践総合センター長

び附属教育実践総合センターによる刊行物のほか、教職支援室の保有データを用いることとした。

## II 教育ボランティア活動の歩み

### 1 教育ボランティア活動の始まり

図1は教育ボランティア活動者数や受入先数等の推移をまとめたものである。

現在の教育ボランティア活動の前身となる活動は平成15年度～16年度の2年間にわたって実施された「放課後学生チューター」事業である。これに伴って学部内に「教育ボランティア委員会」が立ち上げられ、それが現在の教育ボランティア活動に引き継がれている。山梨県教育委員会と連携して事業を進めていくため、平成16年度からは「教員志望大学生による小中学校への支援事業」として山梨大学地域連携事業支援プロジェクトに申請し、平成30年度申請分まで15年連続で採択されている。

このように教育学部の教育ボランティア活動は比較的息の長い取組であり、現在の活動内容や運営スタイルにたどり着くまでには様々な課題があったが、工夫して乗り越え、よりよいシステムへと改善してきた歴史がある。以下、その内容を詳細にみていきたい。

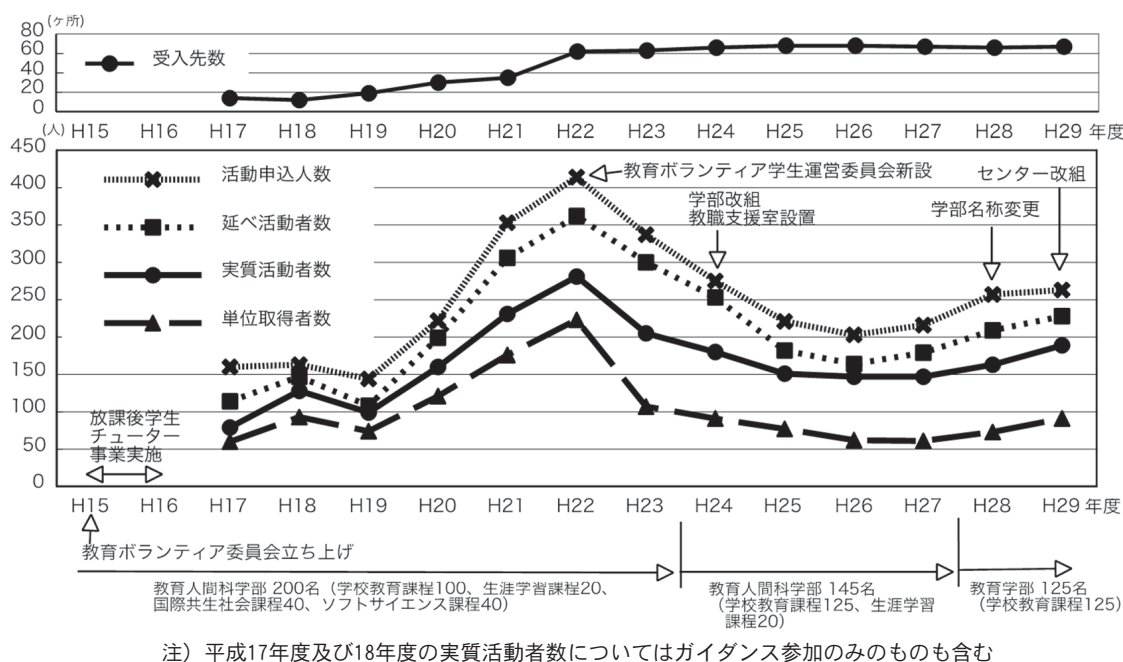


図1 教育ボランティア活動への参加及び受入状況の推移

### 2 教育ボランティア活動の実績

#### (1) 活動申込人数

学生が山梨県内の教育関係機関等に出かけ、児童・生徒の学習支援や行事・課外活動等の支援を行う活動全般を教育ボランティアと呼んでいる。記録の残っている平成17年度以降についてみると、活動申込人数は最初の3年間は150人程度で推移（その当時の学部学生数は学校教育課程100名、ゼロ免課程100名、計200名）したが、平成19年度以降は順調に増加し、平成22年度には約400名に達した。このときに「教育ボランティア学生運営委員会」が新設されている。

その後、活動申込人数は減少に転じ、平成26年度は平成22年度のおよそ半数にあたる200名程度

に落ち込んだ。ただし平成24年度の学部改組により、教育人間科学部の学生定員は145名（学校教育課程125名、ゼロ免課程20名）となっており、教育ボランティアに対する学生の関心やニーズが少なくなったというわけでもないと思われる。

教職支援室は平成24年度の学部改組に合わせて開設され、業務の一つに教育ボランティア運営が含まれた。学部名称を教育学部に変更した平成28年度に学生定員は125名に減ったが、教育ボランティア活動申込人数は平成26年度よりも多い数字を維持している。

このほか、教育ボランティア延べ活動者数及び実施活動者数についても、活動申込人数とほぼ同じ動きをして現在に至っている。

## （2）受入機関

平成17年度の教育ボランティアの受入先は14ヶ所であった。翌年度は12ヶ所に減ったが、その後順調に数を伸ばし、平成29年度には66ヶ所となっている。

## （3）社会参加実習

所定の条件を満たした場合、教育ボランティア活動は「社会参加実習」（選択科目）の単位として認められ、卒業までに最大4単位を取得することができる。平成24年度以降、単位取得者数は50名から100名の範囲で推移している。単位取得のための教育ボランティア活動というよりも、純粋に子どもや学校での学びを深めようと考えている学生が多いことを示している。

## 3 教育ボランティア活動の変遷

教育ボランティア活動の歩みを振り返るにあたって、本稿では、平成15年度から平成30年度までの16年間で4つの時期に分けて概観することとした。

第Ⅰ期（導入期）は、「放課後学生チューター」事業が始まった平成15年度から、教育ボランティア活動による「社会参加実習」の単位化が3年次までに拡大する平成19年度までとした。教育ボランティア活動の基礎づくりが行われた時期とも言える。

第Ⅱ期（量的拡充期）は、教育ボランティア活動の単位化を全学年にまで認めることとした平成20年度から、教育ボランティア活動者数が過去最高となった平成22年度までとした。教育ボランティア活動の意義を学生に対して様々なかたちで周知を進めた結果、活動が学生間に浸透し、学生の参加意欲が高まってガイダンスを前期後期共に複数回実施する等の対応をとった時期である。

第Ⅲ期（質的転換期）は、社会参加実習の単位修得に関して新たに「学びの振り返りシート」の提出や「報告会」参加を義務化した平成23年度から、実質活動者数の減少が続いた平成27年度までとした。教育ボランティアの量的な充実がなされた第Ⅱ期とは異なり、教育ボランティア活動の「質」の向上が求められた時期と言える。

第Ⅳ期（見直し・発展期）は、「韮崎市と山梨大学との包括的連携協定の締結」等、県内自治体との連携が図られ、教育ボランティア活動に対する地域ニーズへの対応が求められるようになった平成28年度から現在に至る期間とした。平成29年度には、韮崎市に続いて富士河口湖町とも包括的連携協定が締結され、学習支援活動が始まっている。また、甲府市保護観察所の要請を受けて学習支援活動が始まるなど、教育ボランティア活動が学校以外へも広がりを見せている時期でもある。

以下では、各期の成果や課題について述べてみたい。

### （1）「導入期」の教育ボランティア活動

平成15年度放課後学生チューター事業の開始から平成19年度までの5年間で、山梨大学における教育ボランティア活動の基盤づくりが行われた「第Ⅰ期（導入期）」とした（表1）。

小・中学校などの教育現場においては学力向上策の一環として、学生チューターや教育ボランティアの有効性や可能性が模索された時期であり、学生にとっては教師力の基礎を身につける絶好

の機会となった。山梨県教育委員会と連携して教育ボランティア活動をスタートし、大学においてはこれを地域連携事業支援プロジェクトに位置づけると共に、教育ボランティア委員会を立ち上げるなど体制が整えられた。平成17年度の1年生向けに選択科目「社会参加実習」を開設し、その後は3年生までを対象に教育ボランティア活動の単位化を段階的に進めていった。同時に学内外の様々な機会を捉えて教育ボランティア活動の重要性について理解を求める活動を展開し、運営に伴う課題把握等に努めた。このように第Ⅰ期（導入期）は、山梨大学教育学部の教育ボランティア活動の基盤づくりがなされた時期である。

表1 第Ⅰ期（導入期）のボランティア活動

年度・活動実績等	活動内容・経緯等
平成15年度 平成16年度 ●参加学生数 38名（H16年度）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「放課後学習チューター事業」（文科省委嘱事業）実施。A市内4つの小・中学校に派遣</li> <li>・山梨大学地域連携事業「教員志望大学生による小・中支援事業」に位置付けて実施</li> <li>・教育学部内に「教育ボランティア委員会」を設置（H15.3）</li> </ul>
平成17年度 ・県教委との人事交流開始（実務家教員の配置）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育ボランティア委員会を中心に活動がスタート</li> <li>・山梨県教育委員会の学生チューター事業への協力</li> <li>・後期から、教員養成推進プロジェクトの一環として選択科目「社会参加実習」を新設。1年生に単位認定を実施</li> <li>・教員養成推進プロジェクト「教職につくことを希望する学生に対する実践的力量形成」に社会参加実習の明確な位置付け</li> </ul>
平成18年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育ボランティア活動の単位化を2年生までに拡大</li> <li>・単位化の課題                             <ul style="list-style-type: none"> <li>—需要と供給のバランスをとること</li> <li>—各講座から学生に直接働きかけること</li> </ul> </li> </ul>
平成19年度 ●実質活動者数 99名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育ボランティア活動の単位化を3年生までに拡大</li> <li>・単位化の課題と展望                             <ul style="list-style-type: none"> <li>—需要と供給のバランスをとること</li> <li>—CNSやポスター以外の広報活動（教育実習事前指導や教員採用試験対策のガイダンス等で教育ボランティアのアナウンスを実施、ガイダンス時には学生による活動紹介を行う等）</li> <li>—学年に応じた系統的・効果的指導方法の充実</li> <li>—中間発表会や学習交流会の必要性</li> </ul> </li> <li>○活動時間の基準となる時間の設定と単位認定の確認（教育ボランティア委員会）</li> </ul>

〔資料〕①センターニュース第14号「平成17年度教育実践事業報告」  
 ②センターニュース第15号「放課後チューターから社会参加実習へ」  
 ③センターニュース第16号「平成19年度社会参加実習（教育ボランティアについて）」

## （2）「量的拡充期」の教育ボランティア活動

教育ボランティア活動の単位化が全学年で実施された平成20年度から、教育ボランティア活動の量的拡大が進んだ平成22年度までの3年間を「第Ⅱ期（量的拡充期）」とした（表2）。

全学年において教育ボランティア活動に取り組み、単位取得も可能となった。「教育ボランティアだより」を発行して活動内容を紹介し、ガイダンス時には学生の体験発表の機会を加える等、様々な工夫を行った。



表2 第Ⅱ期（量的拡充期）の教育ボランティア活動

年度・活動実績等	活動内容・経緯等
<p>平成20年度</p> <p>●平成20年度戦略的プロジェクト地域連携事業支援プロジェクト報告書発行（H21. 3）</p> <p>●実質活動者数160名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育ボランティア活動を全学年で単位化</li> <li>・情報収集調査の実施（秋田大学）</li> <li>・「ボランティアだより第1号」発行</li> <li>・学生2名が教育ボランティア体験談を発表（後期ガイダンス）</li> </ul> <p><b>【課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・受入先との連携と広報活動</li> <li>・交通費等の経費の捻出</li> <li>・事務処理システムの見直し</li> <li>・学生への系統的な指導の必要性</li> </ul>
<p>平成21年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック2010発行（H22. 3）</p> <p>●実質活動者数231名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期ガイダンス及び後期ガイダンス各2回ずつ実施</li> <li>・「教育ボランティア学習会」を開催（前期と後期に各1回）</li> <li>・情報収集調査の実施（琉球大学）</li> </ul> <p><b>【成果発表】</b></p> <p>大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果（参考文献1）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生に対する教育ボランティア内容の事前情報不足</li> <li>・交通費支給の検討</li> <li>・受入先に対して、学生にとっての活動目的の周知</li> <li>・学年に応じた活動内容の提供</li> </ul>
<p>平成22年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック2011発行（H23. 3）</p> <p>●実質活動者数281名（過去最高）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期ガイダンス及び後期ガイダンス各2回ずつ実施</li> <li>・教育ボランティア学習会を教育ボランティア交流会に名称変更</li> <li>・第1回教育ボランティア学生運営委員会の開催</li> <li>・学生による「教育ボランティア通信」の発行開始</li> <li>・教育ボランティアの活動申込みのweb化</li> <li>・危機管理マニュアルを掲載</li> <li>・甲府市教育委員会が「甲府市教育支援ボランティア事業」を立ち上げ、教育ボランティアの受入先が急増</li> <li>・情報収集再調査の実施（琉球大学）</li> </ul> <p><b>【成果発表】</b></p> <p>教育ボランティア活動に関する学生と受入先の教育的価値（参考文献2）</p> <p>学生側：教育的価値は「教育ボランティアの独自性」「子ども理解」「教育現場の理解」「教師の仕事の理解」「学習指導」「生徒指導」の7つ。学生は受入先が後輩教員の養成を行っていることに気づき、教育ボランティア活動が教師としての自己形成に役立つことを理解する。理論と実践を統合させる。これらのことを、学生に事前指導等で理解させる。</p> <p>受入側：教育的価値は「教育ボランティアの独自性」「子どもにとっての効果」「教職員にとっての効果」「学校（組織）にとっての効果」の4つ。</p> <p>結 論：学生と受入先双方が「お互いの考えを意識しながら理解できたらならば、より高いレベルで、この活動に参加する意識の高まりと活動の充実が期待できる」。</p> <p>○活動時間の基準となる時間の再検討と単位認定の確認（教育ボランティア委員会）</p>

〔注〕記載内容は、主に各年度に作成されたガイダンスブックに依拠する。

平成22年度からはガイダンスを前期と後期に2回ずつ実施し、多くの学生が教育ボランティア活動に参加できるよう機会の確保に努めた。また、新たに『教育ボランティアガイダンスブック』を編集・発行し、その活用を通して教育ボランティア活動の有効性・有用性等を学内外に発信する努力が始まった。その後、平成22年度に甲府市教育委員会が「甲府市教育支援ボランティア事業」を立ち上げ、これによって教育ボランティアの受入先が大幅に増加することとなった。

このように、量的拡充期には大学と受入先の双方で取組が進んだ。課題も多々あったが、平成22年度には教育ボランティアの実質的活動者数が281名と過去最高を示すなど、第Ⅱ期は教育ボランティア活動者の量的拡充が図られた時期といえる。

### (3)「質的転換期」の教育ボランティア活動

教育ボランティア活動の内容面で質的転換が図られた平成23年度から、教育ボランティア活動の多様な実践が行われた平成27年度までの5年間を「第Ⅲ期(質的転換期)」とした(表3)。

平成23年度は放課後学生チューター事業から始めた教育ボランティア活動が9年目を迎えた。多くの受入先で教育ボランティア活動が認知され、学校教育現場での活用の必要性・有用性が浸透・定着していった時期である。それを裏付けるかのように、この期間の受入先数は安定的に60ヶ所を超えて微増を続けた。

一方で、この時期の教育ボランティア活動の単位取得者や活動者は激減した。平成22年度から平成23年度にかけて単位取得者数や活動者数が減少した要因として、次の3点が考えられる。

- ①平成23年度から、前期及び後期のガイダンスを各2回から各1回に減らしたことにより、登録のタイミングを逃した学生が出たのではないか。
- ②教育ボランティア委員会では平成22年度、教育ボランティアに取り組む時間数について再検討を行った<sup>4)</sup>。活動先での活動時間はある程度確保されたものの、学生一人あたりの取組時間が減少したことにより、結果的に単位取得者の減少につながったのではないか。
- ③平成23年度から教育ボランティア活動の質の向上を図るため、「学びの振り返りシート」の提出や「報告会」への参加を義務化する方向性が打ち出された。このことが学生には負担となったのではないか。

このように第Ⅲ期に入ってから、教育ボランティア活動の質の向上を図るため、新たな方向性を打ち出した。また、活動の実質的な内容面において、学生からは「事前に活動内容を知りたい」、「活動の場と種類を増やしてほしい」といった要望や改善点が出されていたが、実際には子どもとの信頼関係のづくり方や生徒指導・教科指導等の力量向上等を課題と認識し、教育ボランティア活動の運営に取り組んでいたようである。受入先からは、教師としての基本的な力を身に付けるために、学生には「教育現場の実践と大学の勉強を結び付けながら研究してほしい」など、教育ボランティア活動の学びを深めていくことの大切さについて報告がなされていた。

表3 第三期（質的転換期）の教育ボランティア活動

年度・活動実績等	活動内容・経緯等
<p>平成23年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック 2012発行 (H24. 3)</p> <p>●実質活動者数 205名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期ガイダンス及び後期ガイダンスを各1回実施</li> <li>・学生運営委員会2年目、運営方法の工夫改善</li> <li>・事務処理システム推進（web化、危機管理、保険加入、提出方法）</li> <li>・単位取得に関して次のことをガイダンスブックに記載                         <ul style="list-style-type: none"> <li>①「学びの振り返りシート：単位認定の際の参考となるため、提出しない場合は単位取得ができないことがあります」</li> <li>②報告会：「単位取得希望者は、出席することが原則です」</li> </ul> </li> <li>・情報収集調査の実施（高知大学）</li> </ul> <p>受入側：「教員を目指すうえで学習指導や生徒理解といった面での資質向上につながる」「現実的な対応を経験することで少子としての資質向上をさせることができる」「教育実習とは違った生の現場での子ども様子や教職員の日常を見ていただきたい」等</p> <p>○新たな活動時間で単位認定の実施（教育ボランティア委員会）</p>
<p>平成24年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック 2013発行 (H25. 3)</p> <p>●実質活動者数 180名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職支援室が教育ボランティアを担当</li> <li>・単位取得要件として、新たに「報告会出席」「学びの振り返りシート提出」「報告書提出」の3点を義務づけ</li> <li>・受入先小学校5ヶ所を訪問</li> <li>・情報収集調査の実施（岐阜聖徳大学、秀明大学）</li> </ul> <p>学生側：教職に就くにあたっての課題 「子どもや先生方とのコミュニケーションの取り方」「教科の専門性、教育観」「子どもの誉め方、叱り方」「個に応じた対応等」</p>
<p>平成25年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック 2014発行 (H26. 3)</p> <p>●実質活動者数 151名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受入先小・中学校6ヶ所を訪問</li> <li>・情報収集調査の実施（弘前大学）</li> </ul> <p>学生側：ボランティアの改善点等 「1～2年生には教育ボランティアがあることすら知らない人が多いように感じる」「事前に活動内容等を知りたい」「先生方と指導にあたっての悩みや相談などをしたい」</p> <p>受入側：「教育実習とは違った視点」「教師の様々な仕事を知る」「実体験で生の子どもの姿を理解」</p>
<p>平成26年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック 2015発行 (H27. 3)</p> <p>●実質活動者数 147名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報収集調査の実施（山口大学）</li> </ul> <p>学生側：ボランティアの改善点等 「紹介される場所が遠い」「教育ボランティアが多くの学生に認識されていない、優先度が低い」「給食、交通費がほしい」</p> <p>受入側：「現場の風を感じてもらうことで教職のスタートもよりスムーズになる」「教育現場の厳しさや喜び」「その子に応じた対応」「担当教師との事前事後のコミュニケーションを大切に」</p>
<p>平成27年度</p> <p>●教育ボランティアガイダンスブック 2016発行 (H28. 3)</p> <p>●実質活動者数 147名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報収集調査の実施（岡山大学）</li> </ul> <p>学生側：ボランティア改善点等 「申し込みから早く活動ができるように」「活動の場と種類を増やしてほしい」「先生方と会話できる機会を増やしてほしい」</p> <p>受入側：「教育現場の実践と大学の勉強を結び付けながら研究してほしい」「学び続ける姿勢を」</p>

〔注〕記載内容は、主に各年度に作成されたガイダンスブックに依拠する。

〔資料〕①「教職生活全体に通じた教員の資質能力の総合的な方策について」（審議経過報告）、中央教育審議会、H23. 1

②「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（答申）、H24. 8

③「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（答申）、中央教育審議会、H27. 12

表4 第IV期（見直し・発展期）の教育ボランティア活動

年度・活動実績等	活動内容・経緯等
<p>平成28年度</p> <p>●教育ボランティア ガイダンスブック 2017発行 (H29. 3)</p> <p>●実質活動者数 163名</p>	<p>・教職支援室運営委員会において教育ボランティア活動の単位化（必修化）について議論（従前通りのかたちで取り組むことを確認）。</p> <p>学生側：ボランティアの改善点等 「教育ボランティアという立場上、どこまで踏み込んでよいか」「ボランティア先と大学との連携（情報伝達など）の強化」「通うのが困難（交通の便）」</p> <p>受入側：「個に応じた指導の重要性やその方法の多様性を感じることができ、将来教職を目指す学生にとって非常に重要な経験になる」「実際に子どもに接することで様々な個性をもった子どもの存在を知り、将来就く教師としての資質向上を」「インクルーシブな社会の見聞を広めてもらいたい」</p> <p>・情報収集調査の実施（島根大学）</p> <p>・韮崎市と山梨大学との包括的連携協定の締結（H29. 3）</p>
<p>平成29年度</p> <p>●教育ボランティア ガイダンスブック 2018発行 (H30. 3)</p> <p>●実質活動者数 189名</p>	<p>・甲府保護監察所との事前打合せ（H29. 7）。後期から教育ボランティア活動を実施。</p> <p>・情報収集調査の実施（琉球大学）</p> <p>・富士河口湖町と包括的連携協定の締結（H30. 1）</p> <p><b>【課題】</b></p> <p>・更なる学生を主体とした取り組みの実施</p> <p>・教育ボランティア活動の参考となる資料作成</p> <p>・教育ボランティア活動の学生指導の充実等 （教職支援室の連絡調整→本人・活動先・学内指導担当教員）</p>
<p>平成30年度</p> <p>●教育ボランティア ガイダンスブック 2019発行予定 (H31. 3)</p>	<p>・韮崎市、富士河口湖町との包括的連携協定に基づき、前期より教育ボランティア活動を実施。</p> <p><b>【取組例】</b></p> <p>・第1回教ボラセミナー開催（学生運営委員が主体、企画・運営）</p> <p>・教育ボランティア活動の参考となる資料作成と活用 「教育ボランティア活動にスムーズに取り組むために（例）」 「教育ボランティア 学びの視点（参考例）」等</p> <p><b>【課題】</b></p> <p>・教育ボランティア活動者数の更なる確保</p> <p>・教育実習や教員採用試験対策と連動した学生指導</p> <p>・受入先からの情報提供（と共有）のシステムづくり</p> <p>・受入機関との事前打ち合わせ等による連携強化</p> <p><b>【対策】</b></p> <p>・前期後期各2回のガイダンス実施</p> <p>・教育実習の前と後を意識した報告会での指導内容の充実</p> <p>・対象学年等を具体的に示した情報発信</p> <p>・受入先との事前打合せ等による連携強化</p>

〔注〕記載内容は、主に各年度に作成されたガイダンスブックに依拠する。



#### (4) 「見直し・発展期」の教育ボランティア活動

平成28年度から現在に至るまでの3年間、すなわち教育ボランティア活動のさらなる充実のため、県内関係機関との連携や学生指導のあり方についての見直しが必要となった時期を「第Ⅳ期（見直し・発展期）」とした（表4）。

山梨大学の地域連携が進み、平成28年度には山梨大学は韭崎市及び富士河口湖町と包括的連携協定を締結し、附属教育実践総合センターは教職支援室を窓口として地域の学習支援活動を拡充していくこととなった。同時に、甲府保護観察所等、学校教育現場以外の多様な場での学習支援等が教育ボランティア活動に求められるようになってきた。

第Ⅳ期に入ると、教育ボランティア活動は受入先にさらに深く浸透した。山梨県内唯一の国立教員養成学部への期待の高まりと共に、「実際に子どもと接することで様々な個性を持った子の存在を知り、将来就く教師としての資質向上を図ってもらいたい」など、教職を目指す学生を支援する声が多数寄せられるようになった。

教育ボランティアの活動者数は第Ⅲ期後半に比べると増加の兆しが見え始めた。ガイダンスを通じて学生指導の見直しを行い、受入機関への活動例の提示等、大学と受入先とで情報の共有化に努めたことが影響していると思われる。より充実した教育ボランティア活動を推進していくためには、引き続き様々な視点からの改善が必要となっている。

### Ⅲ 教育ボランティアにおける学びの効果

平成26年度入学生について、教育ボランティア活動への参加が、学生の教員採用につながったかどうかを若干検討してみた。その結果が表5である。

在籍する学生129名の内、約6割の学生が教育ボランティア活動に参加した。教員採用試験を受験した学生についてみれば、約7割が教育ボランティア活動に参加していたことになる。二次合格者のうち、教育ボランティア活動に参加していた学生は85.3%にのぼる。

表5 教育ボランティア活動への参加と教員採用との関係（平成26年度入学生）

	学生数	教採受験者	二次合格者	教員採用者*
学校教育課程 在籍者数	129	69	34	54
教育ボランティア参加者	実数	78	49	40
	割合	60.5%	71.0%	85.3%

\*二次合格者には期間採用等で採用された者も含む

平成31年度採用教員採用試験に合格した2人の学生は、教職支援室の自由記述式のアンケート「後輩に伝えたいこと」の項目で次のように回答している。

「教育ボランティアに積極的に参加すること。二次試験の面接では必ず自身の教育現場体験と結び合わせた質問が出てくる。教育ボランティアに進んで参加することによって必ず役立つ。」「集団討議では期間採用の方が多いと考えると少なからず経験が必要です。そのため、教育ボランティアをしっかりと行っておくことが重要です。…子どもの現状をしっかりと把握していくためには、ボランティアが一番良い方法です。」と、採用試験に向けて教育ボランティア活動に取り組むことの重要性

を指摘している。教育ボランティア活動での経験が、教員採用試験対策にも大きく役立っていることを示している。

## IV まとめ

以上、山梨大学教育学部における教育ボランティア活動を通史的に概観した。教育ボランティアと教員採用試験との関係についても若干の検討を行った。教師の実践的力量形成を目指す教育ボランティア活動の見直しと充実のための課題や方向性については、次のように考えている。

第一に、教育ボランティア活動への参加学生数をさらに確保する必要がある。本学部学生に対する受入機関からのニーズは今なお高く、同時に、学校以外からの受入要望もあり、受入ニーズは増大かつ多様化している。今後は、進路状況把握のための個人面談等の場もさらに活用し、教育ボランティア活動を勧めていく必要がある。また、第Ⅱ期に見られたように、ガイダンスを前期と後期に2回ずつ実施する（現在は各1回）など、よりきめ細かな対応により、学生の参加登録の機会を増やしていけば活動の活性化につながるだろう。

第二に、学生指導の充実を図るための見直しである。教育ボランティア活動を、教育実習や教員採用試験対策とどう連動させていくかを視野に入れる必要がある。教育ボランティア活動を通じ、教育実習前に身に付けておきたい教師としての基礎的な実践力や、教育実習後にさらに高めていきたい教師の実践力をより確かなものとしたいからである。学生は、受入先で様々な体験を積み、教師の仕事、教育観、児童・生徒理解、学習指導、授業づくりの基本などについて、自ら学びの視点をもち段階的に実践力を身に付けていく。そのことを意識しながら教育ボランティア活動の運営や学生指導に取り組んでいくことは、結果として教員採用試験対策に向けての心構えや教師としての実践力の基本を身に付けることにつながっていくだろう。

そのためには、教育ボランティア活動を進めるにあたって、3年次の教育実習を挟んでどのような力量形成に努めたらよいか、「学びの視点（参考例）」（図2）を既存の「学びの振り返りシート」に関連づけることにより、自覚的な学びを促していくことも必要ではないか。また、教育ボランティア学生運営委員会に対する指導や支援の充実も大切である。学生運営委員会が立ち上がってから今年で9年目となるが、ともすると教員の活動の補助的存在になりがちである。今後はできる限り学生主体の活動となるよう考えていく必要がある。今年度、学生運営委員会の企画運営によるセミナーを開催したが、基調報告の内容はすばらしかった。参加は自由であったにもかかわらず30名近くの学生が集まり、満足度の高い学習会となった。このように教育ボランティア活動を通して、運営委員の学生が企画・運営力を身に付けていくことは、教師力の基礎を高めることにもつながっていくと考えられることから、今後も積極的に支援していきたい。

第三に、教育ボランティア活動をより円滑に進めていくためのシステムをさらに改善していく必要がある。受入先や、他大学での学生への具体的な事前・事中・事後指導等のあり方に学び、本学での教育ボランティア活動の充実を図りたい。平成30年度の後期教育ボランティアガイダンス時には、試行的にいくつかの活動先の事前指導資料を参考に、学生及び受入先に向けた資料を作成し提示した。内容の一つは、一日のボランティア活動の流れを理解するための「教育ボランティア活動にスムーズに取り組むために（例）」である。もう一つは、学生に対する指導事項を見直した「教育ボランティア活動先での18の心得」である。これらの資料をさらに充実させるために現在、受入先での学生向け事前指導資料等の情報提供をお願いしているところである。このように情報を整理・集約し、受入先と大学とが情報の共有化を図ることによって、教育ボランティア活動をスムーズに行うことができると考える。

## 教育ボランティア 学びの視点

1年～3年（入学から教育実習前）		教育実習	3年～4年（教育実習後から卒業前）	
学びの視点	具体的な学び		学びの視点	具体的な学び
① 指導者や教師の仕事	指導者や先生方の働く姿	教育実習	① 理想の教師像	私が目指す未来の教師像
② 理想の教師像	ボランティア先や自分が出会った先生		② 目指す子ども像	子どもに身につけさせたい力と未来像
③ 今の子どもの特徴	私の小・中学生の頃と今の子の違い		③ 身に付けるべき教師力	教育実習先やボランティア先の先生方の教育実践や自己体験をもとに、教師力の再考。現段階で私自身が磨きをかけるべき教師力。
④ 育てたい子ども像	学校の教育目標、これからの時代		④ 授業づくりの方法や個別の学習指導のあり方	教育実習での課題を踏まえた、ボランティア先での授業づくりや個別指導のあり方。単元全体を見通した授業計画、授業(指導)構想、教材教具、発問、板書、話し合いやグループワーク等の工夫等。
⑤ 学校・関係機関の役割	学校や関係機関の役割、関連		⑤ 児童生徒理解の方法	教育実習での児童生徒理解の振り返り、より深い児童生徒理解の方法の追及。
⑥ 他の学生からの学び	観察、活動、話し合い等で具体的な発見		⑥ チーム学校、関係機関との連携	学校教育の諸課題等に対する学校校内外の連携
⑦ 授業づくり・個別指導	授業構想、指導方法、教材教具・発問・板書等の工夫		⑦ 特別支援教育の進め方	交流学級の経営 児童の実態把握
⑧ 話し合い活動	話し合いの仕掛け、意欲的な学び		⑧ 自ら設定した視点	具体的な指導計画や指導の実際等
⑨ コミュニケーション力	課題意識をもち、先生方等との対応			
⑩ 学級経営の充実	班づくり、係活動、人間関係づくりなど			
⑪ 施設や教室掲示等の環境	施設・教室・校内の掲示物、花壇等			
⑫ 児童生徒理解の方法	子どもとの接し方、一人一人の児童生徒の違いの理解、信頼関係づくり、			
⑬ 支援が必要な児童生徒	先生からの情報、児童生徒の実態把握			
⑭ 保護者・地域連携	学級・学校通信等、地域人材の活用			
⑮ 自ら設定した視点	具体的な指導計画や指導の実際等			

- 自ら「学びの視点」を設定し、教育ボランティア活動に取り組みましょう。特に、「学びの振り返りシート」を作成する際に、上記の「学びの視点」を参考にして、「教育ボランティア活動を進めるにあたっての決意(目標)」を記述してください。
- 上記に挙げた参考例をもとに教育ボランティアノートを作成し、各項目で自分自身が学んだ見方考え方や、実践して学んだことがらをまとめておくことが、教師力の基礎を高めていくことにつながっていきます。

図2 教育ボランティアにおける学びの視点（参考例）

本稿は、山梨大学平成29年度（平成30年度実施分）地域連携事業支援プロジェクト「教員志望大生による小中学校への支援事業」（プロジェクト代表者：田中勝）の成果の一部としてとりまとめたものである。

### 【参考文献】

- 1) 進藤聡彦・勢田二郎・澤登義洋・角田修、大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果、教育実践学研究14、pp.139～151、山梨大学教育学部附属教育実践総合センター、2009
- 2) 嶋田一彦、教員志望学生が教育ボランティアに取り組むことの教育的価値、教育実践学研究17、pp.1～18、山梨大学教育学部附属教育実践総合センター、2012
- 3) 教育ボランティアガイダンスブック、山梨大学教育学部附属教育実践総合センター
- 4) 平成22年度第4回教育ボランティア委員会記録